

TOMOKI.

ダンス、オブジェ



ママ、永遠だよ、ずっと僕のそばにいてね
兄が旅立つ前の母へのメッセージであった。

人生はフィルムを見ているように流れ動いていく

生まれ、生き、死ぬ 誰もが通る道である

でもどのように進むかはそれぞれが持ち合わす秘密の道

一人の存在、一つの魂、なんなのだろうか？

私は23年前になくした兄のことを想う 22歳であった。

人間はこの世で果たすことが終わるとまた次へと旅立つのだと言い、

彼は私達の前から消え去った。

なぜ彼はそんなに早くこの世旅立たなければならなかったのか。

彼の魂は違った形で私達のところに生きるべきであったのか。

兄はいつも私が困難な立場にいると来てくれた。

息子が出来ると私の前には現れなくなった。

でもきっと 私達の傍にいつもいてくれているのだろう

息子が出来て、私をこの世に来ることを手助けしてくれた家族と

今ある生を続けていくことを助けてくれる家族がいかに大切であるかを知る

両親は智貴（ともき）を見るとそこに彼らの息子をみるらしい。

人生はどこが始まりでどこが終わりなのかわからない

人生は生と死がひとつであるからこそ、はかなく、素晴らしいのである



この作品はダンサー鈴木香里がいろいろな人々、プロジェクト、ジャンルのダンス、舞台芸術を学んできたことで可能となった構成で出来ている。それは、身体が、物、空間、時、に触れるといろいろな形、要素、質に変化していき、的確な表現をすることが可能になり、身体はただ動く要求だけの自己満足なマシーンではなく、身体があらゆる言語となるのである・。

空中を舞う仕事をしてきたことからハーネスを選び、無重力の世界を求めていく。ハーネスは命綱として利用されるものである。この作品ではまさしく命の綱であるへその緒にたとえられる。大空間の中にポツンと浮遊するところから、果てしない世界の中からたった一箇所、選抜された道へと誘導され、その次の瞬間には誰からでもないたった一つしか存在しない大切な生命の始まりに展開する。そこには歓喜があると同時に悲惨な離別が待っている。

オペラの仕事を数多くしてきたことから作品を創る時、総合芸術になることを重要視している。身体、音楽、装置、照明すべてに必然性を求め、ひとつになることを目指している。この作品には鏡、クラフト紙が利用される。鏡は照明の使い方によりいろいろな効果をもたらせる。鏡は昔からいろいろな意味をもたらしてきた。自己を知る為に鏡に姿を映らせることにより自我を知り、未知の世界を探求するのに利用されてきた。暗黒な世界から鏡に反映する光に惹きつけられ我を照らし出すことにより、一人の存在、身体が存在し始める。・

音には、日本の雅楽、kitaro、ボサノバと違うジャンルの音と鼓動のように聞こえる一つの電子音が混ざり合いさまざまな状況へと変化していく。身体は 空気の状態のものが液体のものになり硬いものになり強いものになり弱いものになる。





マリオネティストであるパートナーとのコラボレーションにより物、人形などの静止したものをどのように扱うかにより生と死が生まれることを学んできた。自我を消し相手をどのように生かすかにより自分と相手の存在のバランスの取れた関係を生まれさせる。その瞬間すべてがあるべき形で存在し始める。

番傘が開いていたり、閉じていたり、内向きであったり、外向きであったり、身体のいろいろな部分と接触したりとさまざまな違う形で現れると番傘が違う生きかたを始め、操られる側、操り側、相互の間になにさまざまな対話が生まれていく。それは子供が始めて新しいものに触れる瞬間、自己を知る瞬間、異性に出会う瞬間、意気投合する瞬間、そして離別の瞬間のようである。

更なる喜びを期待するならば過去の喜びは胸の奥に保留しなければならない。自然の成り行きは損失することで学ぶ。希望と現実のずれである。雄大な世界、自然に包まれ、言われるがままに抵抗をしようとも巻き込まれてゆく。ちっぽけな人間の存在に雄大な自然の神たちがお告げを降しにくるよう突然現れる。クラフト紙がはじめは大地のように力強く無動で置かれていたのが、津波のようにガタガタと崩れ落ち過去をすべて飲みこんでゆく。そして今まで存在していた空間は大量のクラフト紙が舞台一面をおおい、まさに戦場のあのような悲惨な状況を表し、過去の形はもうそこには存在しない。クラフト紙を身体にまとい始めると、悟りを開きはじめてた存在、一番美しいこの世での最後の姿を残す。あらゆる思い出が身を抱擁する。人生に一度 喜びも悲しみもを相手のために受け入れる時 ウエディングドレスを着ているようでもある。魂は宙に舞い、身体は地に軽やかに吸い込まれるようにクラフト紙、大地の中へ去っていく。

命はいつの日かまた違うところへ誘導され始める。ポツンと浮遊していたときの雄大な安らぎがまた招待状を差し伸べている。形にはなくなった生命はある日必要とされているところへまた舞い降り、心に残る想いは永遠に忘れることなく生き続けるのである。



一人が二人になり三人になる....

私は息子との出会いと兄との死別を知り

その間を生きている私の存在は何なのか自問するのである

鈴木 香里

